

## 仙台集會 乳児保育分科会 分散会別提案要旨

### A 分散会（ハイブリッド開催）\*仙台会場+ZOOM 仙台・盛岡・愛媛

#### 1 0歳児から主体性を育む環境

（仙台保問研・岩切たんぽぽ保育園・本田 美咲さん）

0歳児クラスで、不安感や緊張感が高く遊びに向かえないAとKに焦点をあてて、取り組みが具体的に示されている実践です。家で母親と遊ぶ経験が少ないAには、信頼できる大人と遊んで楽しいと実感することを大切に、身体の不安定さから不安を感じ保育者に抱っこを求めることが多いKには、食事等の生活面での配慮と共に、椅子に座っての遊びや斜面上り等の遊びで身体の使い方を伝えることで遊びへの意欲が見られるようになりました。個々の子どもの発達や要求に合わせた遊びや空間づくりの重要性が提起されています。

#### 2 一人ひとりの発達を保障し安心できる生活づくりのために ～真ん中クラスのふたばちゃん～

（盛岡保問研・社会福祉法人わかば会うえだ保育園・千葉 滯さん）

0歳児クラスの高月齢児と1歳児クラスの数名で構成される「ふたばちゃん」クラスの2年間の実践に関する報告です。もともと0歳児クラスと1歳児クラスに分けられていたのを、在園児の発達の状態を踏まえて、新たに「真ん中」のクラスが作られました。1年目に「ふたばちゃん」クラスを作り、そこから出た職員間の連携や環境構成の仕方に関する課題を2年目の「ふたばちゃん」クラスに生かしていく様子が読み取れます。その中で「食が進まないAちゃん」を例に、憧れや達成感を感じられるようになっていく子どもたちの様子が描かれています。

#### 3 大人も子どももつながり合って

（愛媛保問研・朝日保育園・大西 智子さん）

1年を通じたE（1歳児クラス、1月生まれ）の変化を中心に、保育の中で心がけられてきたこと、実践されてきたことが記されています。アクシデントにより1歳児と高月齢の0歳児と一緒に保育するなど体制変更を余儀なくされる中、まだうまく言葉で表現できないEの他児への攻撃的な行動や噛みつきに対して、保育者間で話し合い、丁寧かつ継続的にEの気持ちを受け止められてきた姿が印象的です。他方で、保育者間の連携の難しさについても記されており、この点は参加者の方々とも、それぞれがどのような仕方で連携しているのか話し合いたいポイントでもあります。

### B 分散会（オンライン開催）\*ZOOMのみ 熊本・大阪・愛知

#### 1 わらべうたのある生活 ～育ちへの願いをこめて乳児にかかわるあそび～

（熊本保問研・きぼうのこども園・久保 清美さん）

0歳児の保育を見直したい思いをきっかけに、わらべうたを子ども時代の育ちを支える大切な遊びととらえ、保育の核として園全体で取り組んでいる園の実践です。わらべうたを通して0歳児たちと保育者の気持ちが通じ合っていく過程が、まおちゃんの例を中心に具体的に描かれています。メディアがあふれている今の時代だからこそ、人との心地よい関わりができていくことと、人の声や目線、ぬくもりのあるコミュニケーションが大切であることを伝えている提案です。

## 2 やっぱりあそびが大事だね ～安心を土台に友だちへ～

(大阪保問研・ポップ第2保育園・高田 晃二郎さん)

担任2名とも持ち上がりではない状態で4月スタートした1歳児クラス。まずは子どもたちが安心して心地よく過ごせるよう、遊びを通してしっかり共感し思いを受け止め関わる中で、朝のお別れで泣く姿も少なくなってきましたが、MちゃんとAちゃんは遊びを楽しむ点で気になる姿が見られました。しかし、箱遊びを中心に取り組む中でこの2人の遊びにも変化が見られ、保育者や友だちとの関係が築かれていきます。1歳児にとって好きな遊びがあることや教材を吟味することがなぜ大切なのかを考えさせられる実践です。

## 3 ゼロ歳児にとっての散歩 ～一緒に歩いて感じたこと～

(愛知保問研・たんぼぼ保育園・三澤 里穂さん)

コロナ禍ほとんど家庭内で過ごした影響か、保育園生活でも初めての発見に喜びより緊張する0歳児の姿から実体験の大切さを再確認し、例年より早く散歩を多く取り組んだ実践です。歩き始めの頃の歩く楽しさを保障する散歩の中で、自ら見つけたものを保育者に伝えようとする姿が見られるようになりました。さらに活動範囲の広がりに伴い、保育者との手つなぎ散歩に取り組むと、発見に共感したり友だち同士つながったりする姿も増えました。0歳児の散歩の意義と、発達や要求に応じた保育内容を考え合うきっかけとなる提案です。

## C 分散会 (オンライン開催) \*ZOOMのみ 京都・広島

### 1 かたつむりごっこが拡がる・繋がる

(京都保問研・朱い実保育園・門田 慧さん)

1・2歳児混合クラスでの、カタツムリをテーマとしたごっこ遊びの実践報告です。子どもたちが楽しむ前に保育者自身がその活動を楽しもうという並々なぬ意気込みが伝わってきます。また、カタツムリの実物をしっかりと観察する機会を設けることが、その後のイメージの広がり土台になっていることが事例を通してわかります。人との関わり方が不器用なMちゃんがごっこ遊びを通じて変わっていく姿からは、ごっこ遊びが子どもと子どもをつなげ、子どもたちの可能性を広げる活動であることに改めて気づかせてくれました。

### 2 友だちとつながる喜びの毎日を

(広島保問研・口田なかよし保育園・立石 真由美さん)

1歳児の高月齢クラスの実践報告です。特に、他児と関係が作りづらい愛くんに焦点を当てつつ、愛くん個人の支援にとどまらない実践となっています。はじめは、3人という少人数の班から初めて、子どもたちが安心感を感じられるようになると、活動が広がっていきます。愛くんの生き物が好きな特徴を起点として、クラスでツマグロヒョウモンの幼虫のイメージを共有することで、クラスの活動へと昇華し、さらに継続・発展していきます。保育の中で個の育ちと集団の育ちをつなげていくことの重要性について考えるきっかけになるでしょう。